



産学公連携コーディネータに聞く

中小企業の技術開発や製品開発の過程でさまざまなサポートをする都産技研の「産学公連携コーディネータ」。日頃受ける相談や、サポート内容の実際をご紹介します。

金田 光範 コーディネータ

本部



Profile

1972年東芝入社。原子力発電所の監視・制御系のコンピュータシステム開発に従事。その後、社会インフラ向けITをベースに、社内新規事業開発推進を10年ほど担当。2011年東芝退社後、産学公連携コーディネータに。「組込み系技術者のための安全設計入門」等の著作がある。

金田CDの担当曜日
毎週木曜日9時～17時

大手にはできない 中小企業ならではのビジネスを応援します

コーディネータとしての私のポリシーは、「三現主義」です。依頼があったら、まずできるだけ現場・現物・現実を確認します。例えば、ある企業から「健康器具を開発したので外部の評価者を探してほしい」また「連携する大学を紹介してほしい」という依頼があったときにも、すぐに現場へ行って物を見て、話を聞き、相談をしてきた企業の方の実状を直接教えていただきます。

そして、相談者の信条や夢、立場を知って共有することを重要視しています。「自社には強みがない」とおっしゃる中小企業の方もいらっしゃいますが、視点を変えて考えてみると経験を積んできた分野が必ずあるはず。それをどう強くしていくかが重要なのです。希望や夢、意志があれば、会社を育てることは可能です。

その過程にあるプロジェクト管理では、まずニーズをフォーカスして、そこに必要なシーズを育て、製品化にあたっては、外部リソースも利用

して、かかるコストをいかにマネジメントするが必要で。限られた資産・人材・リソースを前提に、社外リソースをどう活用するのか、どう技術移転するのかをサポートするのが、コーディネータとしての私の仕事だと思っています。

それから、私は出会いも大事だと思っています。例えば、産学連携の結果、ミスマッチがあったとしても、出会いをきっかけにそれに近いところで別のヒントが見つかり、新しい開発につながる場合があります。切り拓くべき道は一つではなく、答えも一つではないのです。

ですから、産学連携、産産連携に力を入れていきたい。大学のシーズは、こちらから働きかけないとなかなか出てきませんが、これからは、それを引き出して、中小企業ならではの、大手企業にはできないビジネスを応援したいですね。ニッチな市場でも、いろいろなところに可能性が隠されているので、それを掘り起こしたいと思っています。

●事例紹介 【産学連携の例】

アンドロイドOSを企業用にカスタマイズするなどの事業を行っているA社。社長が大学時代にロボットの勉強をしていたこともあり、ロボット用ミドルウェア「Open EL」を開発、これをデファクト化(業界標準化)しようと考えました。ロボットのソフトのデファクト化はあまり前例がないだけに、チャンスとも言える反面、中小企業が参入するのは難しいので、何らかのご協力をいただけるのかという相談が持ちかけられました。

相談→共同研究までの経緯

- 平成24年 4月 A社から相談。
- 平成24年 5月 金田CD自身が参加しているJASA(組込みシステム技術協会)を通じて、ソフトのデファクトに協力的な大学教授を味方につけようとコンタクト。結果、(独)産業技術総合研究所(以下、産総研)のB氏、首都大学東京のT准教授が味方に。
- 平成24年 7月 東京都へオープンイノベーション事業として助成金を申請、獲得。首都大学東京のT准教授との産学連携として委託研究を10月開始。
- 平成24年 12月 産総研B氏の計らいで、OMG(ソフトの標準化を目指す国際団体)で「Open EL」構想を発表したところ反響大。ビジネス化へ向け大きな一歩となった。



金田 CD 連携はカルチャーの違う人たちが集まるということ。それをまとめるのもCDの仕事です。

Message 中小企業の皆さんへ



「従来の枠からの脱皮を考えている」、「既存の事業や既存の製品に変革が必要と感じている」、「新市場へ進出したいと考えている」方は、ぜひお気軽にご相談ください。人との出会い、異分野技術、異業種との出会いが、変革のきっかけになります。無料ですので、いつでもご利用ください。

もし失敗しても、ミスマッチがあったとしても、七転び八起き、くじける必要はありません。自分の得意分野を思い切り深めて、勝負していきましょう。そのお手伝いをしたいと思っています。

メールでもお気軽にご連絡ください。 E-mail:kaneda.mitsunori@tiri-tokyo.jp